

私たちは世の霊ではなく、神の霊を受けました。それで私たちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです。この賜物について語るにも、私たちは、人の知恵が教える言葉ではなく、霊が教える言葉を用います、つまり、霊によって霊のことを説明するのです。自然の人は神の霊に属する事柄を受け入れません。その人にとって、それは愚かなことであり、理解できないのです。霊に属する事柄は霊によって初めて判断できるからです。（Iコリント2：12～14）

パウロは、十字架につけられたキリストを、雄弁な言葉や優れた知恵で語るのではなく、霊と力によって告げ知らせた。それは、信仰が人の知恵でなく、神の力によるものとなるためであった。ここから、「霊」が神の恵みを悟らせると語る。

信仰的に成熟した者の間では、知恵を語る。その知恵は、この世の知恵や無力な支配者たちの知恵ではなく、秘義としての神の知恵である。それは、神が栄光を与えるために、世の初めから定められていたことである。この世の支配者たちは誰一人、この知恵を悟らなかった。もし、悟っていたら、キリストを十字架につけはしなかったであろう。イザヤが「昔から聞いたことも耳にしたことも／目で見たこともありません（イザヤ63：3b）」と預言していた秘義を、神は愛する者たちのために、霊を通して啓示してくださった。この霊はあらゆることを、神の深みさえも究める。人の内にある霊が人のことを知るように、神の霊が神のことを明確に知っているからである。

パウロは、この霊について下記のように語っている。パウロたちは、この世の霊でなく、神の霊を受けた。神の霊を受けて、神からの恵みとして与えられた福音を知ることができた。この与えられた賜物について語る場合、人間の知恵が教える言葉ではなく、霊が教える言葉を用いる。つまり、霊によって霊を説明する。自然の人間は神の霊の事柄を受け入れることができない。それは、愚かなことと思え、また、理解できないからである。霊のことは霊によって初めて判断できるからである。

神の霊は、人間の内にある霊と違って、神の側から送られてくる。この神からの霊は、自然の人には愚かに見えるか、全く、理解することができない。キリストの十字架は、しるしを求めるユダヤ人にはつまずきであり、知恵を求めるギリシア人には愚かとしか受け止められない。しかし、神の霊を受けた者は、キリストの十字架は罪の赦し、生の絶対的是認を告知する神の言葉となる。神の霊は、神の恵みを明らかにする。

神の霊を受けた「霊の人」は一切を判断する。即ち、全てのことを偏ることなく、公平に判断することができる。そして、その人は誰からも判断されない。即ち、霊を受けてない自然の人からは理解されない。第二イザヤは「誰が主の霊を計り／助言者として主に教えたのか（イザヤ40：13）」と、誰も神については計ることができないと預言しているが、「霊の人」は霊において、一切を判断し、知ることができる。パウロは、神の隠れた秘義は、人の知恵ではなく、霊において福音の恵みを受け止められるのだと力説する。

霊は神から送られ、神と人とを結びつけ、霊において、隠された秘義であるキリストの福音が啓示される。この霊は選ばれた者に付与されるが、霊を受け止めるためのアンテナを建てる、即ち、心を神に向けていることが重要ではないか。霊の人はこの世の力に惑わされることなく、確固として、神の恵みに立脚するのである。